

バードリサーチ ニュース

2005年8月号 Vol.2 No.8

2005. 8. 17.

Photo by Uchida Hiroshi



活動報告

バードリサーチ研究集会(2005)報告

東京都日野市にある多摩平の森ふれあい館で8月6日に、バードリサーチ研究集会を開催しました。とても暑い日でしたが、34名の方が参加してくださいました。ありがとうございます。バードリサーチと皆さんとのやり取りは、ホームページやメールがほとんどです。ですから、実際にお目にかかり、直接お話ができたのはとても嬉しく、貴重な一日でした。



研究発表会の様子。きれいな会場でした。

2004年度のバードリサーチの活動報告の後、会員の方から研究発表をしていただきました。

渡良瀬遊水地におけるクイナ類の生息状況 平野敏明さん(バードリサーチ)

鳴き声再生法を使って、広大な渡良瀬遊水地でクイナ類の分布と個体数の調査を行なったことの発表でした。分布は植生や湿地の水位などの条件によって決まってくるようです。会場ではヒメクイナの鳴き声も再生されました。音声の記憶・記録に自信がない私には難しそうな調査でした。

牛舎でコロニー営巣するツバメの生活 藤田剛さん(東京大学)

巣の空間パターンを解析すると、ツバメが隣巣から見えない場所を選好して営巣していることがわかったという発表でした。牛舎の構造がこの条件にうまく合っているようです。会場からは、「種内託卵」や「子殺し」についての質問がありました。画面を飾る藤田さんのツバメの絵が、ほんわかとした雰囲気を醸し出していました。

東京湾コロニーにおけるカワウの食性 戸井田伸一さん(神奈川県水産課)

戸井田さんは、私たちがカワウのヒナに標識している傍らで、いつも黙々と地面に落ちている魚を調べています。発表は、カワウが吐き戻した魚の種構成でした。魚類42種と甲殻類2種が確認され、春の東京湾周辺でのカワウの食性は、カタクチイシ、ボラ、フナ類の3種が主体のようです。

あるゴイサギの採食日記 遠藤菜緒子さん(立教大学)

ゴイサギの採食場所利用について ①毎日同じ場所を使うのか ②どのくらいの範囲を利用するのか ③採食場所をどうやって探すのか ④どのような場所を選ぶのかという疑問を解くために、繁殖期のゴイサギに発信機を装着して約3ヶ月間追い続けた調査の発表でした。追跡結果を地図に示し、ゴイサギの採食場所選択の行動や耕作との関係など、1羽の個体を追うことから、多くのことがわかるようです。

ツミの周辺で繁殖しなくなったオナガたち 植田睦之さん(バードリサーチ)

1990年代前半に多く観察されていたツミの巣の周辺で繁殖していたオナガが、10年後には見られなくなったが、その原因は、カラス類の増加によるツミの防衛行動の変化ではないかという発表でした。「風が吹くと桶屋が儲かる」には、ちゃんと理由があるのですね。

研究集会の発表要旨はホームページからご覧になれます。
http://www.bird-research.jp/1_ronbun/2005_birdresearch.html

ビデオ上映「渡良瀬遊水地のツバメ類のねぐら入り」

柴田佳秀さんの解説付きで、ツバメとショウドウツバメの大群がねぐら入りする様子を映した、迫力ある映像を上映していただきました。渡良瀬でのツバメのねぐら入りのピークは9月にあるそうです。できればその場に身を置いて、景色全部を目と耳と匂いで感じたい、そんな気にさせられました。

バードベースの使い方講習会 神山和夫さん(バードリサーチ)

調査データの共有の可能性と課題点を整理し、パソコン上での使い方を具体的に説明していただきました。その後、参加者のみなさんにも操作の体験をしていただきました。

研究集会後、多摩川でエクスカージョンを行いました。台風の影響で大きなツバメのねぐらが崩壊し、迫力のある群れでのねぐら入りは観察できませんでした。それぞれに楽しんでいただけよう。【加藤ななえ】



集会後のエクスカージョン。多摩川でツバメのねぐらを観察しました。

学会情報

日本鳥学会2005年度大会 発表案内

まだまだ暑い日が続きますが、まもなく学会の秋が来ます。今年は9月16日から19日にかけて、長野県の信州大学で日本鳥学会の大会が開かれます。

学会というと堅苦しいところという響きがありますが、鳥学会はプロの研究者以外にも多くの学生やアマチュア研究者の発表や参加があり、気楽に参加できる場です。興味のある方は (<http://www.asahi-net.or.jp/%7Eeqe9m-htt/>) をご覧になって、ぜひご参加ください。

鳥学会には、もちろんバードリサーチのスタッフも参加し、いくつかの発表をしてきます。発表の内容を以下に簡単に紹介いたします。要旨の全文は、バードリサーチのホームページにも掲載してありますので、そちらをご覧ください。

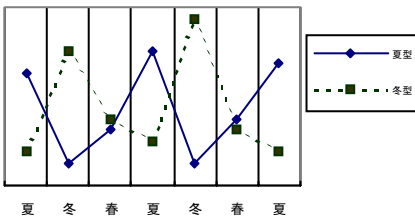
http://www.bird-research.jp/1_ronbun/2005_chogakkai.html

● ポスター発表

個体数の季節変化から見た関東地方におけるカワウのねぐらの特徴

○加藤ななえ・高木憲太郎・成末雅恵・福井和二・金井裕

カワウのねぐらには大きく分けると沿岸に形成される夏ねぐらと、内陸に形成される冬ねぐらがある。このようなパターンが生じるのは、冬季に東京湾の魚が深みに移動するため、魚が採りにくくなり、カワウが内陸部へ移動するためと推測されている。しかし、このようなパターンとは異なるねぐらも



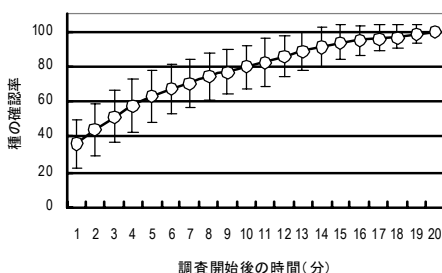
ねぐら・コロニーの個体数の季節変化の型のイメージ図。

存在した。そのようなやや変則的なねぐらについて、地理的条件や魚資源量の変化や人為的攪乱などの要因を検討する。

関東周辺における森林でのスポットセンサスの効率的な実施方法

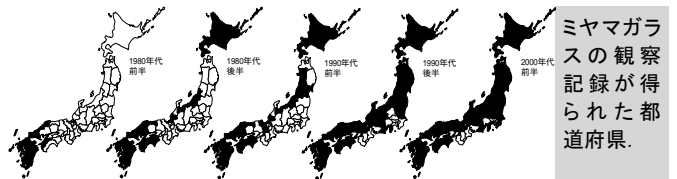
○植田睦之・永田尚志・平野敏明・川崎慎二

日本では鳥類相の調査は主にラインセンサス法で行なわれている。しかし、ラインセンサスが向かないケースがあり、その場合は、スポットセンサスが有効な場合もあると考えられる。そこで、スポットセンサスを効率的に行なうための手法を検討した。結果、調査時間を15分間とすることで、20分実施した時の90%を超える種を記録でき、記録されない種も行動圏の広い種が多くを占めていた。したがって、この方法で複数箇所を調査するのが効率的と考えられた。



日本におけるミヤマガラスの渡来地拡大の経緯 高木憲太郎

ミヤマガラスの越冬地拡大について、アンケート、ホームページ、文献等をもとにとりまとめた。1980年代前半までは九州を中心とした範囲のみに分布していたが、1980年代後半には日本海側に一気に広がり、北海道でも観察記録が現れた。1990年代に入ると中部や東北にも分布が拡大し、現在は太平洋側の一部の都県を除き、全国で越冬するようになっていた。佐賀県では、1950年代まで大群が渡来していたが、1960年代以降殆ど見られなくなったとされており、渡来地が一時期、縮小していた経緯があるのかもしれない。



ミヤマガラスの観察記録が得られた都道府県。

衛星追跡調査より判明したクロツラヘラサギの中継地

○山田泰広・植田睦之・尾崎清明・米田重玄・守分紀子

クロツラヘラサギは、東アジアにのみ分布する希少種である。台湾や香港で越冬する個体の渡り経路はわかっているが、日本で越冬する個体についてはわかっていない。そこで環境省の事業として沖縄県与根遊水地より衛星追跡法で渡り経路を調べた。多くの個体は九州の有明海沿岸まで一気に北上し、その後朝鮮半島を経由して、繁殖地である非武装地帯へと渡ることが判明した。

● 自由集会

カワウを通して野生生物と人との共存を考える (その8)

—繁殖抑制の可能性と限界—
加藤ななえ・高木憲太郎ほか

カワウ対策として3年くらい前から、複数のコロニーで「擬卵(偽の卵を本物とすりかえる)」と「オイルング(油や石鹼液をかけて卵を窒息させて殺す)」による「繁殖抑制」が試みられている。これらの実験の事例をもとに、「繁殖抑制」の可能性と限界についての議論をする。

● サテライトミーティング THE 猛禽

関東地方の都市緑地のツミの繁殖個体数の変遷 植田睦之・平野敏明

ツミは従来、山地で繁殖する小型の猛禽類と考えられてきたが、1980年代にはいとど都市緑地での繁殖が各地で報告されはじめた。東京、宇都宮ともに繁殖個体数は1990年代初めまで増加し、その後減少した。両調査地ともにカラス類(特にハシブトガラス)の妨害による繁殖の失敗が多く観察されており、ハシブトガラスの増加によりツミの繁殖個体数の減少が起きたものと考えられる。【植田睦之】

論文紹介

渡り鳥は頭が悪い？ ～採食の知恵と脳みそと渡りの関係～

Sol, D. Lefebvre, L.J. & Rodríguez-Tejedor, D. 2005. Brain size, innovative propensity and migratory behaviour in temperate Palaearctic birds. *Proc. R. Soc. B* 272: 1433-1441. DOI: 10.1098/rspb.2005.3099

Royal SocietyのProceedingsに、興味深い論文がありました。頭の良し悪しが渡りと関係しているかもしれないということです。頭が良い、悪いという話は時々出てきますが、それを評価するのは難しいです。人間の場合、偏差値だとか、IQだとか、いろんな物差しがありますが、その物差しだけで評価することができるというものでもないですよ。英語の偏差値で24という数字をたたき出したことのある僕でも、こうして英文を読むことぐらいはできているのですから。

バルセロナ大学のダニエル・ソル博士たちはヨーロッパ、スカンジナビア半島、ロシア西部に生息する134種の鳥の渡りと頭の良し悪しの関係を調べました。ソル博士たちが頭の良し悪しの指標として使ったのが、体の体重に占める脳の重さと、新しい採食テクニックの報告数です。クロウタドリは小枝を使って雪を払いのけて採食するそうですが、こういった行動を探したそうです。



クロウタドリ [Photo by 谷英雄]

採食行動の方は理解できますが、脳の重さというのは、どうなのでしょう？脂肪が蓄積すると、頭が馬鹿になってしまうとしたら、えらいことです。バードリサーチニュース2005年3月号(Vol.2 No.3)にも、中村司さんにカシラダカの生態図鑑を執筆していただいています。カシラダカは渡る直前になると20～30%も体重が増えるそうです。脳の占める割合をいつ頃計測したのかということが気になります。

しかし、結果はとてつクリアに出ています。留鳥は1種あたり平均4種類の採食方法を持っているのに対して、短距離の渡りをする鳥では3種類、サハラ砂漠を越えて渡る鳥では、1種類の採食方法しか持っていませんでした。脳の占める割合も同様に、留鳥で高く、長距離渡る鳥で低くなっていました。

脳は他の体の器官よりも多くのエネルギーを消費するので、渡りに多くのエネルギーを必要とする鳥にとって、大きな脳を維持するのは大変です。しかし、ソル博士たちは、そう考えるよりも、脳が小さく、冬を乗り切れるだけの頭の良さがなかったことが、渡りという行動に適応させたのではないかと言っています。新しい行動をあまり生み出せない渡り鳥は、気候変動や人為的な環境の改変に適応できず、留鳥に比べて絶滅する危険が高いのではないかと警鐘を鳴らしています。

だいぶ記憶力が低下してヤバイのですが、ぼくもできるだけやわらかい頭を維持して、生き残っていきたくと思います。【高木憲太郎】

参考文献

Hopkin, M. 2005. Big-brained birds less likely to migrate. *news@nature.com*. DOI:10.1038/news050627-8 http://npg.nature.com/news/2005/050627/pf/050627-8_pf.html

研究誌紹介

Accipiter ～日本野鳥の会栃木県支部研究報告～ 11巻

平野敏明編集 日本野鳥の会栃木県支部発行 定価 1,200円(税別) + 送料

日本野鳥の会栃木県支部の研究誌 *Accipiter* 11巻が発行されました。

今巻では宇都宮市での長期間の鳥類のモニタリングについての報告が2本掲載されています。カルガモ、ハシブトガラス、ダイサギなどの増加と、カイツブリ、コサギ、ツバメ、ムクドリなどが減少していることが示されており、興味深い報告でした。

現在、ぼくは、環境省が行なった全国鳥類繁殖分布調査の結果をもとに日本での鳥の変遷についてまとめているのですが(11月号の日本野鳥の会の野鳥誌に掲載される予定なのでご期待下さい)、その減っている鳥の1つにムクドリがありました。自宅周辺の感覚で「ムクドリは増えてるんじゃない」と思っていたのですが、こういう減っている結果を見ると、なんとなく納得できた思いがしました。

Accipiter 11巻には、上記論文以外にも、サシバの分布状況、渡良瀬遊水地での標識調査の結果、セイヨウミツバチ

の造巣行動によるチョウゲンボウの繁殖失敗例が掲載されています。チョウゲンボウの論文のミツバチの巣の下にチョウゲンボウの骨がある図はショッキングでした。

購入希望の方は、日本野鳥の会栃木県支部より購入することができます。

【植田陸之】

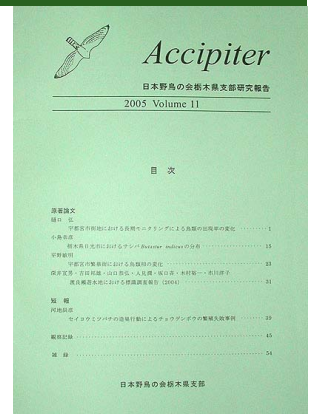
日本野鳥の会栃木県支部

Webサイト(商品販売のページ)

<http://homepage3.nifty.com/wbsj-tochigi/shohin/shohin.htm>

E-mail(このアドレスから直接注文もできます)

wbsj-tochigi@nifty.ne.jp



ゴイサギ 英:Black-crowned Night Heron 学:*Nycticorax nycticorax*

1. 分類と形態

分類: コウノトリ目 サギ科
 全長: 約575 mm 翼長: 259-310 mm
 尾長: 94-116 mm 嘴峰長: 62-80 mm
 ふ蹠長: 63.5-79.5 mm
 体重: 485-683g (成鳥と亜成鳥15個体, 5月中旬~8月上旬)
 ※体重は, 筆者他による測定. 他は, 高野(1981)による.

羽色: 雌雄同色. 成鳥は, 額から後頸にかけて, 背から腰にかけて灰青色. 目の上から額までと, 顔から腹面は白または薄い灰色. 翼羽は灰色. 後頭部からひも状の白い冠羽が数本生える. 目の虹彩は赤. 脚は黄. 嘴は夏には黒だが, 冬期は基部に黄色が入る. つがい形成期には, 脚がサーモンピンクに, 目先の裸出部が青色になる. 幼鳥は, 全体に褐色だが, 白または淡黄色の斑が入る. 目の虹彩は, 巣立ち直後は黄色だが, 1回目の換羽後赤く変わる. 嘴および脚は成鳥の冬期と同じ.



写真1. ゴイサギの成鳥冬羽.

鳴き声: 夜間に飛びながら「クワッ」「コワッ」と短く鳴く. 夕方にねぐらを飛び立つ際にもよく鳴く. ねぐらやコロニー内では, 「コッワ, コッワ, コッワ…」という連続した鳴き声や, 「ゴアー, ゴアー」といった声を聞く. 諍い時には, 「キャッ」と甲高い声で鳴くこともある. ヒナは小さく, 「カッカッカッ…」と鳴く.

2. 分布と生息環境

分布: ヨーロッパ, アジア, アフリカと南北アメリカに生息している. ヨーロッパと中東では, 局所的. 4亜種が知られている. 日本に生息しているのは, 基亜種 *N. n. nycticorax*. 日本では, 全国的に分布し, 北海道と沖縄本島でも近年繁殖が確認されている. 東北以北では基本的に夏鳥. それ以外では留鳥または漂鳥. 青森県では9月になると夕方にねぐらから出発する渡りの群れを見ることができ(写真2).



写真2. ねぐらから出発した渡りの群れ.

生息環境: 平地に多く生息する. 主に水田地帯や河川などの水辺で採食する. 市街地を流れる水路において, 夜間に街灯の下で採食している姿を見かけることもある. 繁殖は, 河畔林や寺社林, 公園・工場の緑地, 高速道路の防風林など様々な環境で行なわれる. 住宅地の緑地で繁殖を行なうこともしばしばあり, 住民との軋轢が問題となる場合も多い. 非繁殖期には, 池沼や河川, 公園や庭などの茂みでねぐらをとる.

3. 生活史

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	非繁殖期			繁殖期			非繁殖期					

繁殖システム:

集団繁殖. 他のサギ類やカワウ *Phalacrocorax carbo* などと混合コロニーを形成することも多い. 一夫一妻制だが, つがい外交尾をしている可能性はある.

巣: 針葉樹や竹林など密な林の内部に営巣することを好むが, 河畔林ではその限りではない. 枯れ枝や折った生木の枝を用いて, 荒い皿状の巣をつくる.

卵: 43.5~55 × 32.8~37 mm, 青緑色無斑の卵を3~6個産む(高野 1981).

抱卵・育雛期間:

抱卵日数はおおよそ24日で非同時孵化し, 育雛期間は約28日(高野 1981). 雌雄とも抱卵・給餌を行なう.

婚姻ディスプレイ:



写真3. 巣に並んで立つつがい.

樹上で相手に接近したのち, 頭を低くして冠羽と頭部の羽毛を逆立て, ゆっくりと足踏みをする. 嘴に枝をくわえて, 上下に首を動かすこともある. また, 合間にしばしば羽繕いをする. つがい形成後に巣に並んで立ち, お互いの羽繕いをしている場面を見ることもある(写真3).

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

●宵っ張りの朝寝坊

ゴイサギは基本的には夜行性である. 日中は集団でねぐらをとる, 日没になるとエサ場へと出かけていく. 夜を通して採食し, 日の出前にねぐらに戻ってくる. 戻った直後は騒がしいが, しばらくすると静かになり, 夕方まで気配を感じさせない程じっとしている.

しかし, 繁殖期には昼間も採食をするようになる. 著者らの研究では, 抱卵期には, 1日交代で抱卵を行なっている可能性が示された. 育雛期には, 1日に3~5回, 昼夜にわたって巣とエサ場とを往復する. ゆっくりと休息するのは, 朝方と夕方との数時間のみであり, 昼も夜も活動している.

繁殖期以外でも日中に採食している姿を見ることがある. 例えば, 上野動物園の屋外ペンギンプールでは, 非繁殖期である冬期にもペンギンのエサを目当てにゴイサギが出現する(写真4). 彼らは大胆にも, ペンギンを脅してエサを横取りする. このことは, 採食効率が特に良い場合には規定の行動様式を変えるという行動の柔軟性を示している. これらの鳥が, 給餌の時間を予測して集まっているのかという問題は, 興味深い研究材料である.



写真4. ペンギンに紛れてエサをもらうゴイサギ(→).

●採食場所は慎重に選ぶ

青森県津軽平野では、繁殖地から10km以上離れた場所でも採食していることが観察された。個体追跡をした結果では、数日から数ヶ月にわたって同じエサ場を使い続けることがわかった。採食場所を替える際には、繁殖地からの飛去方向は概ね変わらず、それまでのエサ場と同方向で新たな採食場所を探す。この保守的な採食場所探索行動は、新しい採食場所でも負うかもしれないリスクを減少させていると考えている。新しい場所でエサにありつかなかった場合に、“そこそこ”エサが採れることがわかっている場所が近くにあればそこに戻って採食できるからである。また、コロニーを飛び立った後、複数のエサ場で短時間(10~30分間)の採食を行い、最終的にその中の1箇所まで夜を通して採食するという行動が観察されたこともあった(図1)。これは、より良いエサ場を選択するための、エサ場間の質の違いを比較するサンプリング行動であると考えている。

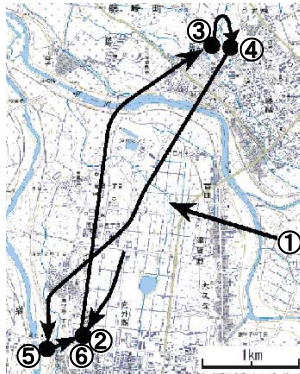
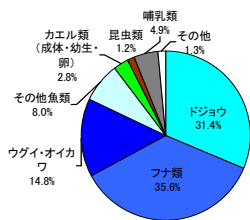


図1. サンプリング行動の例。
●はエサ場を、矢印は移動を示す。①18:50-19:03 ②19:19-19:55 ③19:59-20:22 ④20:22-20:33 ⑤20:35-21:02 ⑥21:05から少なくとも23:09まで。

●エサ内容は日和見主義

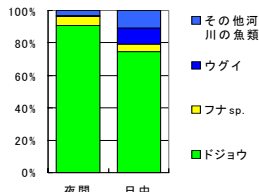


魚類の他、カエル類、昆虫類、哺乳類や鳥類なども採食する(図2)。津軽平野では、春の水田灌漑前や直後は、コオイムシやハタネズミをよく食べる。灌漑後には、水田地帯に豊富なドジョウやカエル類を採食するようになるが、水田の中干し時期になると河川に生息する魚類の割合が多くなる。イネが生長し、水田から水が落とされる頃には、陸生であるコバナイナゴの採食も多くなるようである。

図2. 津軽平野南部におけるゴイスギのエサ内容内訳。1995~2000年の繁殖期前と繁殖期に採集した吐き戻しによる。エサ動物の重量よりパーセントを算出した。

また、一日のうちでもエサ内容が変わる。夜間はドジョウやフナ類、カエル類といった水田地帯由来のエサ動物を多く採食しており、日中は河川由来のウグイやオイカワなどの魚類の採食が相対的に多くなる傾向が示された(図3)。水田地帯由来のエサ動物は、夜行性のものが多く、繁殖行動を行なっている夜間に目立つ。対して、河川に生息する魚類は、日中に遡上行動を行なう。ゴイスギは、魚道や堰堤で跳ね上がってくるエサを待ち伏せ採食するため、河

図3. 日中と夜間とのエサ内容の比較。日中は夜間に比べて河川由来の魚類が多い(Fisher's exact probability test: P<0.001)。遠藤・佐原(2000)から作図した。エサ動物の個体数よりパーセントを算出した。



川では日中の方が採食しやすいと考えられる。つまり、エサ動物の活動性といった変動する環境に合わせて、採食場所を切り替えている可能性がある。

●保護上の問題点

サギ類を取り巻く問題のなかでも、繁殖地における人との軋轢は、近年最も大きな問題になっている。昨年に千葉県成東町で起きた事件は、その最も顕著な例だろう。私有地に形成されたサギ繁殖地の営巣木を土地所有者が繁殖中に伐採してしまい、鳥獣保護法違反で書類送検されることになったのだ。所有者は、周辺住民からの騒音や悪臭に対する苦情が多かったため伐採を決断したという。このような事件は珍しくなく、公にならなかつただけで、筆者も毎年のように同じ問題に直面している。

この事件の根本的な問題点は、私有地の林が人の出入りがなく、サギ達にとって安全な場所に見えたことだろう。この問題は、常から所有地の手入れをすることで回避できる。かつては、燃料や食材を調達するために屋敷林には人が頻繁に入り、手入れをしていた。しかし近年、その習慣が廃れてしまった。そこにサギたちが入ってきたのである。もちろん、住宅地の拡大も一つの要因であり、背景にはサギ類が繁殖できるまとまった林、人との軋轢が起きにくい河畔林などの減少も係わっている。

今年の5月に、NPO法人行徳野鳥観察舎友の会が企画した千葉県下全域サギ類コロニー調査に私も参加する機会をいただいた。繁殖場所の減少という根本的な問題を解決していくためには、このような基礎的な調査をもとにサギ類の繁殖場所選択に関する研究も必要だと考えている。このような活動がより広く行なわれ、サギのみならず人にとっても不幸な事件がなくなってくれることを期待している。

6. 引用・参考文献

遠藤菜緒子・佐原雄二. 2000. ゴイスギ(*Nycticorax nycticorax*)の繁殖期の日周活動と採餌場の利用. 日本鳥学会誌 48: 183-196.
高野伸二(監修). 1981. カラー写真による日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会. 東京.
Voisin, C. 1991. The Herons of Europe. T & A D Poyser, London.

執筆者

遠藤菜緒子 立教大学大学院理学研究科 (生命理学専攻) 動物生態学研究室

ゴイスギを研究し始めてから早10年。いつの間にか博士課程も5年目になりました。調査に行くのを我慢して、博士論文の準備をする毎日です。主にゴイスギの採食生態を研究していますが、コロニー動態にも興味を持っています。



富士山麓の樹海にて。

レポート

捕食圧によって臆病なアマミヤマシギが増えた可能性について

石田健 東京大学

バードリサーチニュース2005年6月号(Vol.2 No.6)に植田さんが、オナガの営巣習性が10年間に变化したという報告をされている。オナガの場合ほど明確に結論は出せないし、背景の要因はもっと複雑だと思われるが、捕食者の増加にともなって、臆病なアマミヤマシギやアマミノクロウサギの割合が増えた可能性がある。

奄美諸島の固有種、アマミヤマシギ *Scolopax mira* は、奄美大島と徳之島で繁殖する。その奄美大島個体群は、おそらく、森林伐採や道路建設による森林の分断化と、それに伴って森林地帯でも増加したと考えられる外来のマンガース等による捕食圧の相乗効果によって、1990年代に分布域がせばまり、生息個体数が減少した。私たちは、



写真. アマミヤマシギ.

1992年3月に環境庁(当時)の特殊鳥類調査、2002年3月には10年間の变化を知るための独自調査として、奄美大島と加計呂麻島の全域において、アマミヤマシギの夜間自動車センサスを行った(石田ら2003)。

1992年には、どの場所でも「のそーっ」としている個体が多く、じっくり観察ができ、写真撮影も容易だった。記録と撮影を終えても動かないので、自動車をゆっくり進めると、たいていの個体は自動車の先をとことこ歩いて進み、ある場所までいくと舞い上がって車のすぐ上を戻って行った。中には、向きを変えて、自動車のすぐ脇の目の下をのそのそと歩いて戻った個体までいたのを覚えている。このときすでに、名瀬市近郊では林道で観察できるアマミヤマシギが数年前より著しく減少していた。

2002年の調査のときには、名瀬市に近い奄美大島の中・北東部の林道でカウントできる個体数がさらに減少し、比較的良好な森林植生が残っていても観察できない地域が広がっていた。さらに、自動車が近づくと「さっ」と飛び立ってしまったり、すぐに警戒態勢に入ってカメラを向けるとすぐに飛び立ってしまう個体が多かった。観察密度が高く捕食者が少ないと考えられる奄美大島西南部には、歩いて逃げる個体もいたが、少数派という感じだった。

1992年は229kmの調査区間で160羽を記録した。そのう

ち、スチールやビデオのカメラで撮影記録できた個体は、87個体(55%)だった。これに対して、2002年は511kmで164羽を記録したが、撮影記録できたのは39個体(24%)だった。(ここでは石田ら(2003)と異なり、未確認のアマミヤマシギらしい個体の記録も加えてある。)

1992年の調査時に行動の詳細を記録しておけば正確な比較ができたのだが、残念なことに当時はそこまで考えが及ばなかった。撮影記録の残っている個体数は、記録のしやすさの変化を表す指標として便宜的に示したものであり、また、林道の舗装率や路側の植生、交通量、調査者の技術向上など正負両方に相関があると推測される他の要因も考えられるので、単純に比較はできない。とはいえ、観察した私自身の記憶や印象と合わせて、2002年には臆病なアマミヤマシギが確かに多かった。のんびりした個体が、多く捕食され臆病な個体が多く生き残った結果だろう。

調査期間を、林道上でアマミヤマシギのなわばり行動が観察される繁殖期初期に集中して実施した全島センサスの調査はこの2回だけであったが、それ以外にも一部の区域では夜間センサスを行なった。また、2003年からは、環境省の保護増殖事業の一環として継続的に、全島センサスが実施されている。この調査では、調査期間の縛りをゆるくする代わりに調査区間を長くしている。これらのセンサス中やその他の観察においても、1990年代前半に比べて、自動車から素早く逃げる俊敏な行動をみせる個体の割合が増加した傾向がみられた。

また、観察できる個体数や区域が同じく減少したアマミノクロウサギでも、2002年ごろに素早く動く個体を見かけ、彼らも走るんだと驚かされた。ただ、2003年より後には、ふたたび、のんびりとした個体が見られるようになったという印象がある。環境省によるマンガースの駆除対策がある程度効を奏してきたのではないかと、私は期待を抱いている。

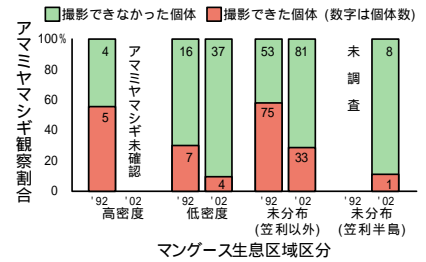


図. 2002年には1992年に比べて、撮影できた個体の割合が少なかった。また、両年とも、マンガースが生息していない地域ほど多くのアマミヤマシギが撮影でき、警戒心が弱く、逆にマンガースが高密度で生息している地域で警戒心が高かった可能性がある。マンガースの高密度地域では2002年にはアマミヤマシギが観察されなかった。奄美大島北東の笠利半島は、地理的に特殊なので分けて示した。

引用文献

石田 健・高美喜男・斎藤武馬・宇佐見依里. 2003. アマミヤマシギの相対生息密度の推移. Strix 21: 99-109.